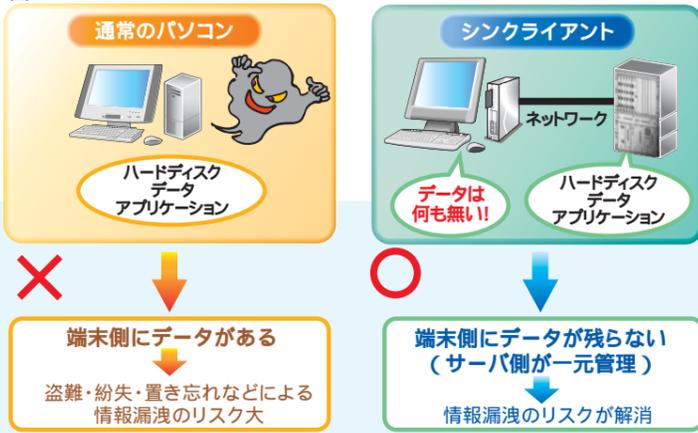


図1



セキュリティ対策を背景に急拡大

シンククライアント

最近、業界・業種を問わず、シンククライアントの導入が進んできた。シンククライアントとは、ハードディスクやCD-ROMなどの記憶装置を搭載しない、必要最低限の機能のみ使用可能なクライアント端末のことである。その仕組みや注目される理由、特徴について解説する。



再び注目を集めるシンククライアント

シンククライアントは、1990年代半ばに一度注目を集めていた。パソコンとそれを利用するためのソフトウェア費用、運用保守費用、ハードウェアやソフトウェアの故障やトラブルにかかる人件費を含めた、いわゆるTCO(Total Cost of Ownership)を削減できると考えられたためだ。しかし、シンククライアント端末がパソコンに比べて安くなく、全体の導入コストが高かったこと、ネットワークの性能が十分でなかったことなどから普及しなかった。

ところが2005年、流れが大きく変わる。4月に個人情報保護法が施行され、情報漏洩問題への危機感を背景に、企業のセキュリティ意識が急速に高まった。そして、これらの問題に対する有効な解決策としてシンククライアントに再び注目が集まってきた。

シンククライアントの仕組み

シンククライアントはハードディスクを持たない端末である。このため、端末側にはアプリケーションやデータは存在せず、サーバが一元管理する(図1)。シンククライアントはネットワークを介してサーバに接続し、すべての処理をサーバ側で実行する。いかなる処理であっても、端末側にデータが残らない仕組みだ。ちなみに、記憶装置などを搭載する通常のパソコン、シンククライアントに対してファットクライアントと呼ぶ(も、ローカルにアプリケーションやデータを保存しなければ、シンククライアントとして使用することができる)。

情報漏洩対策の切り札として市場を牽引

IT専門調査会社IDC Japanの調べによると、シンククライアント専用端末の出荷台数は2007年で11万1千台(実績値)、2008年には21万台に達する見込みだ。また、2007年から2012年にかけて、年間43.4%の高い成長率で国内の市場規模が急拡大していくと予想されている。

その大きな要因が情報漏洩対策だ。情報漏洩事故が発生すると、経済的損失も甚大になることが、社会的信用の失墜により、企業の存続も危ぶまれる事態となる。そのため、企業全体として取り組むべき重要課題との認識が広がってきたのである。

こうした中、シンククライアントは情報漏洩問題に対する非常に有効な解決策として、業界・業種を問わず広く認知されつつある。なぜなら、記憶装置を持たないシンククライアントにはどんなデータも存在しないからだ。仮に、従業員のモバイルパソコンが盗難や紛失の被害にあったとしても、そこから企業のデータが漏れることはない。パソコンにデータが存在する前提で、外部に情報が漏れないように苦慮していたこれまでのセキュリティ対策とは根本的に考え方が異なる。



漏洩人数とインシデント件数の経年変化

出典：NPO日本ネットワークセキュリティ協会

「2007年度情報セキュリティインシデントに関する調査報告書」(2008.6.20)

Thin Client DC

インテックのシンクライアントサービス シンクライアントDC



インテックはデータセンターサービスの1メニューとして、5月よりシンクライアント環境の構築と運用管理を支援するシンクライアントサービス「シンクライアントDC(データセンター)」の提供を開始しました。

24時間体制の 堅牢でセキュアなデータセンター

「シンクライアントDC」は、インテックの堅牢でセキュアなデータセンターにサーバを置き、お客様のパソコンのデータやアプリケーションを一元管理するサービスです。ハードディスクを持たないパソコンのレンタル提供やサーバの運用管理、24時間体制のシステム監視やヘルプデスクなどのメニューを用意しシンクライアント化を支援します。

また、お客様が現在利用しているアプリケーションがシンクライアントで正しく稼働するかを確認するためのテスト環境も提供いたします。

月次利用料金で導入が容易に

利用料金は、ユーザID数、端末台数など内容に応じた月次利用料金制であるため、導入時の負担が少なく、お客様はレンタルの端末を導入するだけで簡単にシンクライアント環境に移行することができます。

端末形態にはデスクトップ型、ノートパソコン型がありますが、どの端末からでも自分のデスクトップ環境を呼び出せ、格段に利便性とモビリティを向上させることができます。また、シンクライアント用のサーバが各端末のデスクトップ環境を一元管理するので、お客様のIT部門は各端末の管理業務から解放されます。

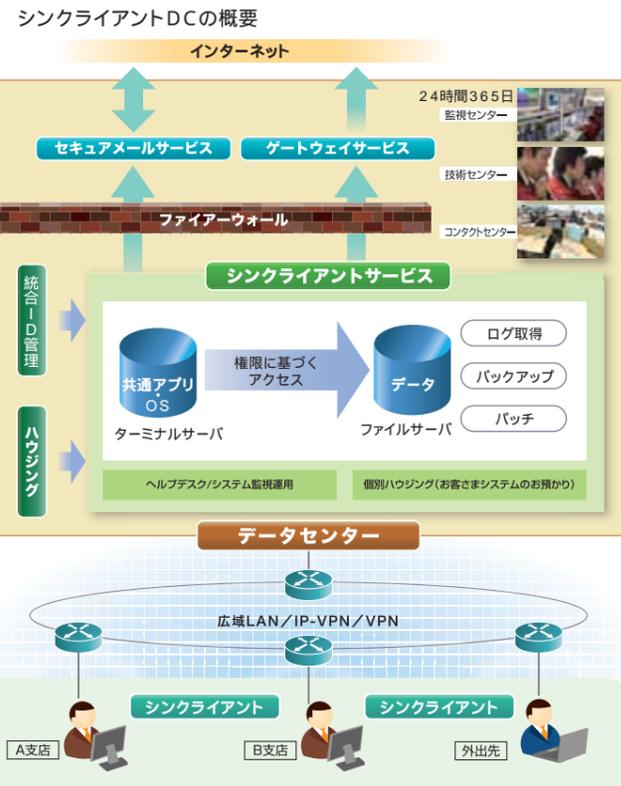
災害や障害発生時にも 事業継続をバックアップ

インテックのデータセンターは震度7クラスの地震にも耐える構造を持ち、セキュリティへの備えも万全です。ターミナルサーバなどのサーバは、障害時に備えてバックアップ用の機器を用意しており、ハードウェア障害時にも継続稼働できる信頼性の高いサービスを提供しています。

また、お客様のご要望に応じて、セキュアメールサービ

スやゲートウェイサービス、統合ID管理ソリューションなどを組み合わせた総合的なセキュリティソリューションも提案いたします。さらに、シンクライアントの省電力化およびデータセンター内でのサーバ統合やストレージ統合を実現することで、グリーンITにも取り組んでいきます。

インテックのシンクライアントDCは、お客様企業が抱えるセキュリティ対策、環境対策、コンプライアンス対策、事業継続性/災害復旧対策、TCO削減、情報システム管理の効率化などの課題解決に強力に貢献いたします。



「シンクライアントは初期投資コストが高い」という話をしばしば耳にする。確かに現状では、サーバ側の設備費用などが通常のパソコンと比べて1.5〜2倍ほど高く、初年度のTCOは割高になりやすい。しかし、クライアント端末の参入企業が非常に多くなったことや、システム構築ノウハウが蓄積されたことで、システムの低価格化が進んでいる。

さらに、シンクライアントによる環境では、サーバがOSやアプリケーションを一元管理するため、ソフトウェアの更新やパッチの適用をサーバ側で一度に行うことができる。また、ハードディスクなどの駆動装置を搭載しないため、故障しにくいという特徴を持つ。トラブル対応に要していたコストや手間を大幅に削減することができるため、数年間の運用でTCO削減が期待できる。

また、以前は懸念されていたネットワークの性能や品質において、現在では十分業務で利用できる環境が整ってきているうえ、通信コストも下がっていることも、シンクライアントの導入を後押しするであろう。

モビリティ向上も大きな魅力

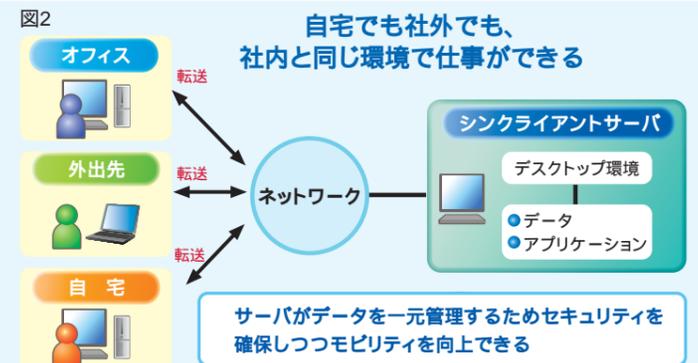
セキュリティを確保した状態で、モビリティ(移動性)を向上させるのも、シンクライアントの大きな魅力の一つである。

シンクライアントによる環境では、ネットワークが繋がっていれば、他の端末やオフィス以外(外出先、自宅など)からでも、本人認証をすることで、自分のデスクトップ環境を呼び出すことができる(図2)。

シンクライアントでは、サーバがアプリケーションとデータを一元管理するため、より堅牢・強固なサーバ環境が求められる。震災や火災などの不測の事態でサーバがサービス不能に陥り、その結果業務がストップするようないかならない。

その対策として有効なのが、24時間365日の安定稼働を実現するデータセンターである。シンクライアントの導入にあたっては、データセンターの高度なセキュリティや堅牢なファイリリティなどの面も十分に考慮しなければならないだろう。

さらなる業務継続性の向上のために



どこにいてもオフィスと同じ環境で仕事ができる利便性は、社外活動の多い営業担当者や、在宅ワーカーなどに高い業務生産性をもたらす。また、消費電力は従来パソコンの約20〜50%であり、軽量で、バッテリー容量に余裕が生まれるので、モバイル利用に最適である。